

学 位 論 文 審 査 要 旨 公開審査日 2017 年 2 月 22 日 (水)

報告番号：甲 第 1715 号	氏名：剣木 憲文	
論文審査 担当者	主査 教授 糸井 隆夫 印	副査 教授 河合 隆 印
		副査 教授 長尾 俊孝 印
<p>審査論文の題目： Feasibility of intensity-modulated radiotherapy combined with gemcitabine and S-1 for patients with pancreatic cancer (膵癌に対するゲムシタビン、S-1 併用強度変調放射線治療の有用性)</p> <p>著 者： Norifumi Kennoki, Hidetsugu Nakayama, Yuichi Nagakawa, Yuichi Hosokawa, Tomohiro Itonaga, Yu Tajima, Sachica Shiraiishi, Ryuji Mikami, Akihiko Tsuchida, Koichi Tokuyue</p> <p>掲載誌： Molecular and Clinical Oncology 4.1 : 43-46. (2016)</p>		
<p>論文要旨：</p> <p>膵癌は難治癌であり、治癒切除されたとしても再発率が高いため、術前化学放射線療法の有用性が報告されている。これまでにゲムシタビン、S-1 を併用した通常放射線治療成績が本邦から報告されているが、比較的高い有害事象の発生率を有していた。近年、強度変調放射線治療（以下、IMRT）がより有害事象の少ない治療として脚光を浴びている。本論文は局所進行膵癌に対するゲムシタビン、S-1 を併用した IMRT の実行可能性を検討した報告である。組織学的または細胞学的に証明された膵管癌で、遠隔転移や播種を認めない局所進行症例が前向きに抽出された。21 名の局所進行膵癌症例のうち 20 名が化学放射線療法を完遂でき、残り 1 名は治療中の胆管炎により治療中止となった。全体として、グレード 3 以上の嘔気、嘔吐は見られず、計画標的体積が 200 ml 以上を照射した患者では有意な好中球低下 (500/μl 以下) を認めたのみであった。ゲムシタビン、S-1 を併用した IMRT は局所進行膵癌に対して局所進行膵癌に対するゲムシタビン、S-1 と同時併用した IMRT は、血液学的毒性は耐えられる範囲であり、非血液毒性も軽微であり、実行することが可能であった。</p>		
<p>審査過程：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究の背景・目的および最新の診療ガイドラインに基づく局所進行膵癌に対する放射線化学療法について適切に説明できた。 2. ゲムシタビン、S-1 を併用した IMRT の長所および短所について説明できた。 3. IMRT と通常放射線治療との違いについて正しく説明できた。 4. これまでの諸家の報告との差異について正しい見識を有していた。 5. 本研究の問題点（限られた症例数、後方視的検討など）について適切に認識していた。 		
<p>価値判定：</p> <p>本研究は局所進行膵癌に対してゲムシタビン、S-1 を併用した IMRT が安全かつ有効に施行できることを報告した初めての論文であり、本治療が局所進行膵癌の標準治療としての可能性を示唆した点で今後の膵癌診療に貢献するものと考えられ、学位論文としての価値を認める。</p>		